

『無者キリスト』を読む⑤ 第三部 無的実存

『無者キリスト』 第三部 第二章 「天鐘」（キリストの福音の霊想）

2001年9月9日（東京 新宿）

●復刊『無者キリスト』の「あとがき」

今日は、『無者キリスト』を読むという講筵ですけど、今度、河出書房新社から『無者キリスト』（復刊）が装いを新たに出版されるということ。もう作業は随分進んで、あとは私の「あとがき」を待つばかりという状況らしい。私は大体、文章はあまり苦労しないけれども、今回は随分苦労いたしました。まだこれで確定稿と言えるかどうか、必死になって昨日書いて、今日持って参りました。この「あとがき」はA4で9頁のものです。これを書くのに4倍、5倍の下書きをいたしまして、結局こんな形になった。『無者キリスト』の「あとがき」ですので、今日のお話に関わりが深いですから、ここでご紹介いたします。

《復刊「あとがき」》 奥田昌道

このたび小池辰雄著『無者キリスト』が装いを新たに、出版されるに至ったことは、多年にわたって著者から身親しく教えを受けた者の一人として、心から喜び、感謝するところである。

『無者キリスト』は、もともと「小池辰雄著作集」全十巻のうちの第一巻として、1975年秋、小池辰雄著作刊行会によって世に送られたものである。その年、著者は71歳、それまでに蓄積されてきた思索と研究と祈りの集大成として、この第一巻に全生命を注ぎ込む思いをこめて、執筆に携わっていた。

「無者キリスト」というおそろしく世界で誰も使ったことがない表現をもって著者が訴えたかった内実は何か。それについては、本書を熟読していただくならばおのずと明らかとなるであろう。また、本書にこめられた著者の祈りと本書の構成及び内容については、本書の冒頭の「総序」において簡潔的確に述べられているので、それをお読みいただきたい。

以下には、本書に流れている著者の聖書の理解、福音の把握、一言で言えば、著者の信仰と思想の特色について、述べてみたい。

著者小池辰雄は、1904年2月7日、東京に生まれた。5歳の時に父を亡くし、母の手一つで五人の子女の末子として育てられた。やがて、父親代わりの長兄政美が、北京の地で客死する。1921年9月22日、26歳1か月という若さであった。遙かな中国の地から遺骨を抱いて帰る母は、過労と落胆のあまり黄海の船上で失明してしま



う。兄の死と母の失明という相重なる悲痛な出来事に直面して、著者は人生のどん底を味わった。

長兄政美は、内村鑑三の高弟であった藤井武を師と仰ぎ、藤井武の厚い信頼と顧みを受けていた。信仰深かった兄に従って著者は、旧制高校時代に東京大手町での内村鑑三の聖書講義に列席し、次いで、兄の師である藤井武の集會に、目の見えない母の手を引いて、氏が召天するまでの5年間を皆勤する。

その10年後、1940年9月22日、兄の命日を期し、かつは外出ままならぬ失明の母を慰めるべく、武蔵野の自宅にて、独立の聖書集會を開くこととなった。著者の独立伝道の第一歩であった。

そして終戦を迎えて5年後の1950年、著者に一大転機が訪れた。同年11月、深い祈りの中で著者は、天界の主キリストから直接に聖霊のバプテスマにあずかった。使徒行伝第2章に記述されている、五旬節の朝の出来事にも比すべき、いまだ味わったことのなかった神秘的な霊的体験であった。

それ以来、著者の聖書の読み方が一変したという。

新約聖書に記されているキリストの言、行、使徒行伝や使徒書簡に現われているところの「聖霊」の事態が、決して過去の出来事の記述にとどまるものではなく、今や、永遠の現在として、回質の迫力と息吹きをもって著者の全身に浸透するにいたった。

「聖書は頭の理解でわかるものではない」、「聖書は身読すべき書」、「驚嘆驚倒して読むべき書なり」とは、著者が常に口にしていた言葉である。

「祈り」とは、自分をキリストの中に投げ入れることだ。十字架で、無私、無罪を賜<sup>たまわ</sup>っていることを全存在で受けとり、主の御前に平れ伏しの心をもって、絶対恩寵<sup>おんちよう</sup>なる十字架の主様の中に祈り入る。そこで主様との一如の根源現実を賜る。十字架で無私、無罪を賜っている恩恵の場に、同時に聖霊が臨み給つ、と説く。十字架の贖罪と、永遠の生命の実体である聖霊とは切り離すことのできない根源現実である。恵みとはキリストが恵みそのものだ。キリストは無条件にご自身を我々罪びとに与えようとなさっている。

「私はキリストに圧倒されて生きています。もはや信じてなんか生きていません。」

晩年の著者は、このように告白しつつ、神讚美、キリスト讚美の伝道の生涯を92歳まで費いた。わずかに1週間病床に臥しただけで、1996年8月29日夕刻、著者は主キリストの御許へと旅立って往った。

こうした著者の信仰と思想の特色として、次の三つを挙げたいと思う。

第一は、著者の告白するキリストないしキリスト教は、西欧世界において変容を遂げたキリスト教ではなく、福音書において自在なすがたで顕現している霊的人格としてのキリストを、日本人の心をもって歪みなく受容することによって著者の心魂の中

に形成されたキリストである。著者にとってキリストとは、太陽の光のごとく、無色にして無限色の光を放ち、万人を救い上げ、永遠の生命を与えてやまない霊的人格である。著者の信ずるキリストは民族的な制約、限界を突き破り、一切を包摂し、一切を活かす愛そのものなるキリストである。

各民族には、それぞれ固有の宗教的伝統があり、独自の精神世界を形づくっている。それを西欧的キリスト教によって排除ないし否定するのではなく、それぞれの良さを活かしつつ、愛の光の中に包み込み、生命づけていく、そんな広さと深さをもったキリストの福音こそが真に世界に平和をもたらすものである、と著者は語りかけている。

西欧において形づくられたキリスト教になじみがたい日本人にとって、著者の告白するキリストは、そうした西欧的キリスト教の枠から解放された無限定、無量なるキリストである。著者は、キリスト教といわずして、「キリスト道」という。日本人は古来、道の民であり、実生活の中で真理を身につけることを学んできた民だからである。

長年、ドイツ文学、ドイツ宗教史を専攻し、おのずと西欧の文学、思想、宗教に造詣ぞうげいの深かった著者は、他方で、仏教及び、中国・日本の古典に親しんできた。こうして著者の中で、東西が融合した。

著者の語るキリスト及びキリスト道は、ユニークでかつ、世界に通用する普遍性を帯びるものとなっている。本書第三部の第一章「無者＝無的実存者」や第二章「天鐘」、第五章「宗教と文化」をお読みいただくなれば、そのことに気付かれることであろう。

第二の特色は、知的なものと霊的なもの、知性と霊性の双方が著者において全き調和を保っていることである。

従来、ややもすれば、理性と霊性、知的次元と霊的次元とは、相容れないものとして相互に排除し合ってきたように思われる。キリスト教界においても、知的・学的探求に傾斜するか、超越的世界を希求して霊的諸現象を追い求めるかのいずれかに偏する傾向にあった。

著者は、深い祈りと宗教体験を通して聖書及び神の絶対次元に深く分け入りつつ、それでいて、決して宗教的「諸現象」にふり回されるようなところがない。思索と信仰とが全き調和を保ち、まさに「健全な福音」という安心感を与えてくれる。

第三の特色は、「聖」と「俗」の共存である。

少数の聖職者だけが救いにあずかるのではない。「聖」なる方が「俗」なる世界に降りて来て、俗なる人間を、あるがまま、そのままに救い上げる。闇を光に化する、死せる者に生命を与える、日常性の中にこそ聖なるものが宿る。日常生活の中で我々は、神の絶対次元に触れ、救いにあずかり、生命づけられて生きてゆく。神・キリストは、ご自分の無限無量の愛をもって、一切を荷い、一切を包み、一切を生かしめ給う。その愛に貫かれて我々俗人も、同質の愛をもって隣人に接し、隣人を助ける存在とされ

ていく。

このような生き方を著者は体現していた。》

以上です。私は「小池先生は」とか、そういう呼び方はここでしなかった。やはり客観的に書かなくてははいけませんので、「著者は」と書いた。私と先生との個人的な関係も極力出さないで、長年「身親しく教えを受けた者の一人」という書き方をしました。内村鑑三先生や藤井武先生のこと、「内村鑑三」「藤井武」という、いわば呼び捨ての表現にいたしました。これは広く世の人に読んでいただくときに、余りにも身み鼻び肩かたとか、どちらかに肩入れをするとか、そういうふうなことは却って誤解を与えることになってはいけませんから、これは突き放して書く。しかし、言いたいことだけは言わせていただきますということを書いてみました。

### ● 第三部 第二章 「天鐘」 (キリストの福音の霊想)

それでは今日は、『無者キリスト』の第三部の中の第二章「天鐘」(キリストの福音の霊想)という所を読みます。私は始めここはもう、皆さんはきつと何度も読んでおられるし、ごく簡単にして第三章の「三一神の所在」という所へ行こうかなと思つて、もう一度読んでみたら、捨てがたいんですね。これはやはりじっくりと皆さんと読もうと思つた。小池先生の本を読むときは、ただ読み流すのではなくて、読みつつ味わいつつ、そして祈り入るといふこと。そういう思いでじっくりと味わつて読むのがいいのではないかと思ひなおしまして、そこで今日は、第二章の「天鐘」に多分、限定されることになると思ひます。

これをお書きになったのは、冒頭に出てきますように1955年なんです。

「一九五五年の大晦日の夜、除夜の鐘を聞きながら」

ということが始まっています。そして、翌年1956年の『曠野の愛』誌の春季号(第24号)の冒頭に載つた文章なんです。これを読みますと、私が「あとがき」で書きましたような先生の特徴がもう既にこの時点で非常によく表われています。

1956年といいますと、私がちょうどキリストに導かれる年なんです。この年の夏に私は市川喜一兄弟を通してキリストに触れた。それから3年後の1959年の秋に小池先生に出会うことになる。そういつた1956年の春にお出しになったのがこの「天鐘」といふ文章です。多分、大晦日おおみそかの夜にこういふことを瞑想されて、一気にお正月に書いてしまわれたのだらうと、私は推察しております。

そんなことで当時を——まだ生まれていない方もいらつしやるかもわかりませんが——当時を振り返りながら、これを読んでみたいと思います。

### 《第二章 天鐘 (キリストの福音の霊想)》

#### 諸行無常

一九五五年の大晦日の夜、除夜じよやの鐘かねを聞きながら瞑想した。少年時代に、母や兄や



姉と除夜の鐘を炬燵こたつにあたりながら聞いた小石川同心町時代は今いずこ。母は失明生活三十余年の苦杯を味わいながら今年(一九五六年)米寿を迎える。その兄も姉も既に地には居ない。(母は一九五七年一月一九日召天した)。

この年の翌年ですね、お亡くなりになっていきます。実はそのお母様がお亡くなりになった時の告別式から、小池先生は録音テープに自分の話をすべて録るようになりまして。だから、この時以降のものしか残っていない。1950年にあの大幅換を遂げておられますから、質的にはぶれないようになっていきます。ですから、このお母様の告別式の式辞以降ずっと録られていますテープは本当に宝物だと思います。

先生は1940年を期して集会を開かれた。そして1950年に物凄い大幅換を遂げられた。その後に書かれた文章の中に、あるいはお話しになった中に、

「本当に私は失明の母の眼を癒してやれなかったのだろうか。もつともつと真剣に祈るべきではなかったのか」

と、そういうことを言っていて、自分を責めておられるところがある。あの頃の先生は凄くそういう意味の癒しの働きがありましたから、他人においていろんなキリストの癒しというものを通して人を救うということをやれなかつたこと、自分のお母様に対してそれを真剣に自分が祈らなかつたということに責め苦を感じられたという。なにか先生らしいなという思いがいたします。でも、お母様は、視力が奪われたことによつて内面の眼が開かれたんですよ。だから、お母さんは、

「目が不自由だ、自分は不幸だ」

ということを一言も仰らなかつたそうです。それが一層、先生には辛かつたみたいですが、それでも、そういうことでありますが、88歳でしたかね、米寿でキリストの御許に行かれるわけです、ここに「米寿を迎え」とありますから。

北は北海道、南は九州の鐘の音がゴーン……ガーン……。いんいんたる鐘のひびきである。

「祇園精舎ぎおんしやうじやの鐘かねの聲こゑ、諸行無常しよぎやうむじやうの響なごみきあり、婆羅雙樹ばらそうじゆの花の色いろ、盛者しょうじやひつすい必衰ひつすいのこわりをあらわす。おこれる者も久しからず、唯春ゆいしゆんの夜の夢ゆめの如し。たけき者も遂ついににはほろびぬ。偏ひとへに風前かぜのまへの塵ちりに同じおなじ」。

平家物語のこの名句によれば、梵鐘ぼんしゆは人間界の諸行無常しよぎやうむじやうをはかなみ、煩惱ぼんごうより解脱げだつせよと響なごみくが如くである。

同じく「無常」を語る散文詩、有名な方丈記の一節が連想される。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。……朝に死に夕に生くるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。不知しらず、うまれ死ぬる人いつかたよきたり、いつかたへか去る。又知らず、かりのやどり誰がためにか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。



どうせ我々は地上では仮の宿りにすぎない。それにもかかわらず、いったい誰のために心を悩まし、何によって喜びを得ようとするのか、目をよろこばそうとしているのか、という反語的な表現ですね。

そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、

「すみか」というのはこの身体のこと、「あるじ」は我々の精神という人格です。

言はばあさがほの露にことならず……」

いかにも日本人らしい無常観である。

非常にはかない無常観が流れています。ヒルティの本にも、

「人間はどこから来て、どこへ行くのか？ 我々はどこから来て、どこへ行くのか？

神さまのところへ我々は行く。土で造られた者でありながら、霊の止まる人と

されて、キリストの御許へ、神の御許に羽ばたいていくんだ」

という角度から、「どこから出て、どこへ行くのか？」と言ってますけれども、この日本の方丈記なんかは全くそういう希望はありませんから、

「一体、どこから来てどこへ行くのか。儂い存在ではないか」

ということを言う。それから、「伝道の書」から引かれています。

これらに対比さるべき無常観が聖書の中にもある。

「コーヘレス曰く、空の空、空の空なるかな、すべて空なり。日の下に人の労して作す

ところの諸々の労作はその身に何の益かあらん。世は去り、世は来る。……方の言用

い尽くされて人なお言い尽くす能わず。目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充つる

ことなし。さきに有りしものはまた後にあるべし……。日の下には新しきものあらざ

るなり。……」(伝道の書第1章より)

万物は流転を繰り返している。始めもなければ終わりもない。そういうふうな言い方です。

ギリシアの哲人ヘラクレイトスも「パンタ、レイ」(一切は流転す)といった。生き

とし生けるものが「死」という現象によって一線を画されているこの現実を直視せよ。

つめたい墓石の前に立って人生を瞑想せよ。この「死」を如何にして突破するか。私

は五歳のとき父の亡骸を見た。その後幾度か知人の葬儀に列して同じような相を見た。

彼らのたましいの去処如何。……》

それから今度は、シラーの詩が出てきますが、これは省略いたします。テニソンの詩も引用されています。

### ● 鐘身一如

次の316頁の「鐘身一如」からが天鐘のお話になりますので、ここから読みます。先程ずうつと冒頭から引用してきましたように、本当に諸行無常である。「ゴーン、ゴーン」と鳴り響く鐘の音は日本人的な思想、感情からいえば、いかにも儂くて空しい。それにもかかわらず、



翌日になると、

「お正月おめでとうございます！ 新年おめでとうございます！」  
となるんですからね。だから、

「正月は冥土めいどの旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」(一休禪師)

と、一休さんが言った。そのくらい日本人というのは非常におめでたいんですね笑。「儂い、儂い」と言っているかと思うと、お正月、新年になりますと、パツと様子が変わるんです。それでドドツとお詣りまいにあちこちへ出て行く。八百万やおよろずの神々の所へお詣りに行く。そういうふう非常にめでたく出来ています。そこを一つ突きぬけて、福音に突き抜けていけば、

「我々が願っていたものはここに本当のものがある。本体はこれだ」

ということになるんですけれども、そこまでは徹底しようとしないうのが、わが民族性のような思いがします。だから、私がさつき書きましたように、

「ヨーロッパ的キリスト教ではなかなか日本人は受けつけない。それを日本人の心をもって訴えかけてくるのがこの『無者キリスト』ではないか」

というのが私の言いたかったことなんです。

### 《鐘身一如いちぢんしん》

さてここに我ら東洋の子でありながら、西方からの福音を呼吸している者において、新たに鳴り出でる響きはどんなものであろうか。除夜の鐘かねを聞きながら瞑想しつつ、私自身はどんなことになったか。除夜の鐘は百八ツの煩惱を消す徴として、百八ツうち鳴らすと幼少の時から聞かされていたが、梵鐘ぼんしょうの音を聞くことによって罪業ざいごうが打ち消されれば文字通りの福音だが…。

本当に鐘の音が百八ツ鳴るうちに身も心も全部清めてくれるなら、そして新しい新年を迎えるなら、それはありがたいんだけど、本当にそうだろうか。

星を上げば星となり、花を眺めれば花となり、水を浴びれば水となる心境 即ち鐘を聞きつつ全身を鐘にした。鐘と身と一如の境地である。煩惱の顧慮は消えてゆく。撞かれる鐘そのものとなって瞑想をつづける。

「百八の煩惱を撞く梵鐘を瞑想すれば鐘身一如」

鐘には足がない。鐘はすなわち足場 立場をもたぬ存在である。足場 立場なく、主義、主張なき者といえ、いかにも不定見の如く聞こえるが、私は水母くらげの如くふらふらと漂いつつ、主義主張を朝三暮四ちようさんぼし的に変える亜流であろうとするのではない。また主我的に主義、主張を固執して人を審く。パリサイになって、キリストの敵とは毛頭なりたくない。さりとして円転滑脱えんてんくわつだつの巧智者流は御免である。

つまり、世渡りを上手にすることは御免である。

それでは何か。頭上に鉄索てつさくをもつ吊鐘つりがねのように、わが頭上にはキリストの不見不断の「愛の綱」(ホセア11・4)がおろされている事態である。鐘に足場があったら、鐘



は鳴り響かないのである。もし私が福音の事態を自己の信仰、自己の神学、自己の主義、自己の実存、といったように私したら、福音は小主観の限定を受けて、その偉大さを発現してくれないのである。無私、無色、無立場、無主義。絶信の信、絶学の学、「無義の義」(親鸞の言葉)、無愛の愛とつねづね申す所以である。おのれの側の主観も主義も力みもはずれてゆくのである。それは地球が太陽のおどろくべきエネルギーで引き回されているという自覚、覚他である。地球それ自体はなんたる無力者で。かくてこそ、この自転も公転も妙えなる天則をもって行なわれている。地上の生きとし生けるものみな太陽の光熱に依存している。此の如く、我らがキリストに依存する事態を、主体的覚存という。》

この「覚存」という言葉は、おそらくその後に使っておられないと思う。その前には「覚他」という、他者を自覚するという言葉がある。自分を自覚し、他者を自覚する。

太陽と地球の関係で、我々は地球だといえますと、地球はいかにも自分でひとりでクルクル回って動いているように思うけれども、実は太陽という絶対的な偉大なる存在に依存して、むしろその引力で一定の間隔を保ちながら、その周りをグルグル回っている。しかも、太陽から無限無量の光をいただいて、そして地球上の生きとし活けるものがみんな活かされている。地中に潜んでいる石油も石炭もそういったエネルギーは全部、太陽の光の変化したものである。そういうふうには、地球は自分に望めることは実は、自分を活かしているところの太陽に気づくことである。それを「覚他」というふうに仰ったんですね。この凄

い他者に気づき、他者に圧倒されるならもう自分という小さな者は全部すつ飛んでしまう。自分はその吊鐘のように上から首ねっこをつかまえられて、ブラブラぶら下がっている存在です。足場、立場を持たない。多分、鐘は吊り上げられる前は、どこか台の上に置かれているでしょうね。その台の上に置かれた鐘をいくら突ついても、ボコッボコッという音しか鳴らない。それが上に吊り上げられて、空中にぶら下げられて、「もうじたばたしても始まらないぞ、観念しろ」と言われて、「はい」といって空っぽになったら、「ゴーン、ゴーン」と鳴ってくる。

それも鐘の質によって——全部、お寺の鐘の響きが違う——その地方の空気の質もありましよう。撞く人の技術もあるかも知れない。けれどもやはり、鐘の質というもの、あるいは大きさ、そういったものがそれぞれの響きを微妙に変えていく。そして、鳴っているのは一体、鐘なのか空気なのか。それぞれの撞木なのか。ゴーンと撞かなければ鳴りません。けれども、もし空気がなければ鳴りません。空気に抱かれ、そして空気と響きあって、あの美事な音色を発する。

それで、自分はその鐘のような存在でありたい。つまり、キリストさまによって首ねっこを捕まえられて、

「私は主義も主張も何もありません。あなたが私の全てであってください」



と、全部明け渡す。そういう存在でこそ、私という鐘が見事な響きを発する。それは私から出たものではない。キリストから出る響きである。そのような実存でありたいと。私が初期の頃に先生からいただくお葉書や書物における署名の号は全部、「天鐘」という。それから後は、先生は無数に雅号が出てきますけれども、最後は「天弓」とか、「天海」とかになりましたが、初めは「天鐘」が第一番目の先生の号だったと思います。だから、この「天鐘」という文章は非常に先生にとつても思い出の深いものだろうと思います。

〔編者註：小池辰雄日記では、天の兄(政美)を小樅、地に残された弟(辰雄)をざんしょう残樅(のこれるもみ)と謂い、1928年12月1日以降の自分の日記を「残樅日記」と称していることから、当時の辰雄は「残樅」を号としていたものと思われる。また、小池政美の日記(これを辰雄は「樅の日記」と称した)の1918年12月25日に次の記載がある。「……デンマークを樅で救った彼のダルガス父子を思え。デンマルクの荒野からヒースを追って、ノールウェイの大樅を育てるにはアルプスの小樅が必要であったのである。けれども大樅は終生小樅をその伴侶とする事が出来なかった。緑の野を変じて緑の林となすがためには又小樅をぎり払わねばならなかった。小樅に成長を助けられつつ結局は小樅と離れなければならなかったのが大樅の性質であり運命であった。」(「曠野の愛」誌9、10月号より)。兄政美は、別れなければならなかった女性を小樅と呼び、失意のうちに日本を離れ、独り不帰の旅(北京赴任)へ向かったものと思われる。また、辰雄は天空高く飛び去っていく雁と彼岸、悲願をかけて「飛雁」と称していた頃もあった。〕

## ●天鐘一体

### 《天鐘一体

しかも見よ！ 東洋の鐘の腹の中を。

ヨーロッパのベルは、その中に鈴のように「ガラン、ガラン」と鳴るようなベロゼツ「舌、クラッパー(打撃用錘)」が付いている。それが響き合う。ところが、東洋のものは何もない。天空、空っぽだという。

そこには何も無い。西洋のその如くガラン、ガランと鳴るベロがない。東洋のは唯だ是れがらんどつ(空)である。しかしこの「無」は虚無の無ではない。空無である。鐘の空洞は無限の天空を宿しているのである。鐘は天空に抱擁され、天空は鐘の中に宿る。鐘が撞木しゅもくで衝つかれるとき鳴るものは天か鐘か。実に空無の如き鐘の腹の中の天空が鳴るのである。それはまた天空を宿したる鐘の音でもある。鐘と天とはここに一体である。天と鐘とはかく一如である。

「天空を腹に宿せる鐘の如ごとみ霊の君を宿しまつらん」

それぞれの鐘の大小、鐘の鋼質、鐘の形状、鐘の厚み等にに応じて天空が種々の音質を以て鳴るのである。何たる秘義ぞ。

私という鐘が、原始福音体たるキリストに、愛の霊網を以て吊るされ、無私、無立場、



無主観とされ、聖霊に抱擁ほうせつされ、聖霊を宿して、神の聖旨みむねに打たれて、天韻を発する。そのとき天鐘は天韻無鐘の相を呈する。然しかかあらしめ給え！ 栄光しょうこうみ名にあれ！

「天韻」という号も使われたこともありませぬ。

まことに私は十字架のキリストの贖罪により「私」という旧きアダムから解放されて無「私」とされた。これ恩寵おんちゆうの現実、信仰の現実である。このなまの現実の私自身はしかし相変らずの罪びとに過ぎないにも拘かかわらず、キリストは十字架の事実を以て私に無私、無罪を宣して下さっている。それ故に、いよいよ現実に無私となれ無罪となれ、否無私の人にしてやる、罪なき者に完成してやるのとて実力を以て推進させて下さる。その実力とは何か。罪に勝ち、死に勝ち、陰府よみを踏まえ、サタンに勝ち給うた神の義そのものなるキリストの生命、復活のあの聖なる霊生、聖なる生命である、キリストのみ霊たまである。

ここは大事な所です。もう既に1956年冒頭にこれだけのことを仰っている。先生は52歳です。この時から既にこれだけのことを言っておられる。自分ではない。自分はどこまでもダメなやつだと。そのダメなやつを「ダメでない」と言ってください。それが絶対の恵みなんです。その「ダメでない」と言ってください。それによって、それが絶対の恵みなんです。それが恵みというもの、恩寵の絶対現実、絶対恩寵という。

人間は自分を見るではないですか。自分を見てガツカリして、

「ああ、先生は52歳でこんな凄いことを言っている。私はダメだ」

なんて、そんなのではないというんです。これは皆さん一人ひとりが天鐘ともうされてしまった。それが十字架の有難さなんです。小池先生という特別な人だけがそういう天鐘であるのに対して、我々は相変わらずゴミみたいな存在であるというのではなくて、一人ひとりが天鐘の質を持っている。鐘の質はみんな違う。万人みな違う。一人ひとり違う。神さまはひとつとして同じものをお造りにならなかった。そのごとく個性的でありながら、他と代えがたい独自性を持ちながら、しかしそこに貫いている同質なるもの。非常に各人の個性的な個たる独自性と、それからそれを貫く普遍的なるもの。この二つを美事に調和させてくださるのが福音なんです。

私はさつき「民族」ということを言った。日本民族、中国の人、インドの人、ヨーロッパの人、アメリカの人、みんなそれぞれ生お立ちも風土も宗教的伝統も違うんですから、それぞれの民族性を持っているわけです。その民族性の中で、ヨーロッパの中で育はぐまれてきたキリスト教は、自覚すると否とにかかわらず、やはりヨーロッパ的な質を持った、ヨーロッパ人のキリスト教として作られてきたんです。それを今度、日本へ持ってきて、

「その通りにしろ。あなたたちは和服を捨てて洋服を着る。和式の木造の住宅に住まないで鉄筋の所に住め。それしかダメだ」

と言ったら、これはおかしいんですよね。日本人は賢いですから、全部を受け容れてしま



った。中国料理もあれば、西洋料理もあれば、日本料理もある。それは誠に多種多様であります。そういうことで、非常に日本は柔軟にすべてを受け入れるんですね。そういう民族性を持った日本人に対して、

「キリスト教でなければダメだ。しかも、そのキリスト教は、私たちが説く我々の派のキリスト教でなければダメだ」

というのが、我々が接してきた宣教師たちの伝道だった。アメリカから来た宣教師は

「アメリカのこれではないとダメだ」

と、ヨーロッパの人は

「これではないとダメだ」

という、それぞれが自分の主義主張を押しつけてくる。そして、政治的な面でもそういうような形になってきますと、鎖国という形で反応してしまっただけです。

「日本は滅ぼされるのではないか、植民地にされるのではないか」

と、そういう危機感をもって、生命そのものを排除したんですけれども、それは一つには、持って来る持って来方が悪かったと、私は思います。それを突き抜けて、个性的であると同時に普遍的で、万国に妥当性を持ちながら、しかもそれぞれの国の個性、在り方や今までの伝統等をただ否定するのではなく、活かしていくという、内側から活かすこと。日本人なら日本人のよき、柔軟性、感受性、そんなものを活かして、芯の強さを与える。私は、本当に日本人に欲しいのは芯の強さ、びくともしない凶太さ、そういうものがほしいんです。単なる繊細さとか、そういうものだけでは、日本は生きていけないと思います。

だから、各人が本当の意味の強さを持つ。それでいて、本当の柔軟性を持つ。それでこそ我々のこれからの目指す方向、生き方があるのではないかと思います。そういうことをこの「天鐘」という所で既に言っておられる。

《まことに私は十字架のキリストの贖罪により「私」という旧きアダムから解放されて

無「私」とされた。これ恩寵の現実、信仰の現実である。

と。「なまの現実」ではない。「信仰の現実」と仰る時には、これまでに何度も言っておりまじょうに、今、なまのストレートにそのまま聖だというのではない。しかし、その奥に見えている現象面、今生きている相対的な自分の奥に、もう揺るがない絶対的な質をくださった。これは目には見えない。しかしながら、やがて現れてくる。やがてからだをなして現れてくる。そういう種が既に播かれていた。そういう種、質、これは永遠のものであって、これは誰が何と言つても否定しきれないものだ。それをキリストはくださった。

「これを拒んだら、私はキリストを拒むことになる。そこでは一歩も譲ることがで

きない」

というその叫び、それがここに表われているんです。

これ恩寵の現実、信仰の現実である。このなまの現実の私自身はしかし相変らずの



罪びとに過ぎないにも拘らず、……」

罪びとなら罪びとなんです。義人なら義人なんです。「義人にして罪びと」とか、「罪びとにして義人」とか、そんなものは向こうの人には通用しないんですよ。

日本人はそこが柔軟でしょ。いろんなものを受けいれる、重層構造をそのまま受けいれる柔軟性がある。だから、私はこの小池先生の福音は日本人に最もふさわしい福音だと思う。それをもって自分たちが——いうならば夢かも知れないけれども——生まれ変わった大和民族が世界に向かって発信するならば、そうしたら、世界を動かすと思うんですね。現に向こうの人たちは禅なんか物凄く憧れているんですもの。向こうはあまりにも一面的にものを考える。それに対して、禅というのは正に言葉で説明できない。しかし、何かがあるということ、憧れて来るわけでしょ。それを、

「いや、あなたのところから伝えられて来た福音が正に禅以上の凄い重層構造をもつて豊かさを持っているんですよ」

ということを我々は向こうの人たちに証をする責任がある。そういう意味で、我々は神さまからそういう使命を授かっている。これは内村鑑三も気づいている。藤井武も気づいている。そういうことなんです。

キリストは十字架の事実を以て私に無私、無罪を宣して下さっている。それ故に、いよいよ現実に無私となれ無罪となれ、否無私の人にしてやる、罪なき者に完成してやるとして実力を以て推進させて下さる。その実力とは何か。罪に勝ち、死に勝ち、陰府を踏まえ、サタンに勝ち給った神の義そのものなるキリストの生命、復活のあの聖なる霊生、聖なる生命である、キリストのみ霊である。

これが原動力だと。だから、

禅宗的な悟入の「無」ではなく、恩寵の実存的な「無」であるが故にこそ、み霊に於ける「無限」の生命である。これ私が「無即無限」という所以である。かかるキリストの恩恵の現実を誰に否み得んや。この惨めな私が、惨めさの奥に「至聖所」を賜わっている(ヘブル10・19)。我々は「聖霊の宮」(第一コリント6・19)「神の宮」(第一コリント3・16)である。

ここに先生は、「惨めな私」とハッキリ告白している。その惨めさの奥に、惨めならざるもの、光輝くものがある。これは賜りたるものですから、自分で獲得したものではないから、先生は、

「私のものではないんだよ。しかし、まぎれもなく宿っている」  
という。キリストは、

「あなたと一つになつていいるんだよ、それはあなたに上げたあなたのものだよ」と。しかし、

「自分でそれを獲得した、自分の手柄だ」



なんていうふうには錯覚したら、それは霊的傲慢になる。どこまでも平伏ひれふしているところに宿り給う神の恵みの生命、これがあなたの中に輝くんだよという。あの真珠の養殖みたいですね。貝の中に何か種みたいなものを入れますと、それが真珠になって生長して輝きを発する。なにか聖霊というのはいくつか貝の中に宿る真珠のような思いがいたします。

かかる事態は私の私わたくしすべき信仰ではない。賜たまわりたる信仰である。それ故にかかる信仰を告白することは主の恩恵を讃えること、栄光を主の十字架と復活と聖霊に帰することの外の何もでもない。だから無私なりというのであって、私が何か偉そうに自分を無私の人間であるなどと揚言ようげんしているのでは絶対でない！ 無私も大死も砕けも、私にとっては全くキリストの恩恵を、恩恵の実力により全身全霊を以て受けて限りなかるべき一貫せる事態であって、その質は無限に深めらるべきものであって、地上にて完了など思いもよらぬところである。さればこそみ霊たまの生命の充滿の無限に進展してゆくはずのものである。否、実にみ霊の実力こそが旧き私を排除して限りなく新生展開せしめ給うのである。この死生の展開はパウロが申した如くである。すなわち、

「罪につきて死にたる我らはいかでおその中に生きんや。汝ら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは(キリストとの霊的合一)、この死に合うバプテスマを受けしを(キリストと偕に十字架されたこと)」(ロマ

6・23)

正にこの贖あがなわれたる罪びとそのものが、かかる恩寵おんちようによりキリストと一つにされる事態を受けとることを信じていう。

恵みの事態を「はいっ」と言つて、そのまま受けとることを「信」というのであって、「自分の信仰」とか、「自分は固く信じます」とかいつて、何か自分を主張するのではない。どこまでも圧倒されている。恵みに圧倒されて「はいっ」といつて、それを頂いている事態、これが「信」であるという。

ここで面白いことを言っておられますよ。「信」と「誠」ということ。人偏に言。神の言が私という人間の中に切り込んでそこに宿った、真珠のように。その事態、それを「信」というんだと、こういう言い方ですね。

神の「言」たるキリストが罪「人」たる私に一体となつて下さる事態を人偏に言といふ「信」が表現しているではないか。かくの如く神の「言」たるキリストが私に「成」ることをこそ「誠」とはいう。この外に誠は私にない。私にとっては根源的な意味に於ける霊的とは、キリストがわがうちに受肉して下さるこの恩恵の事態を意味する。その他の霊的な諸現象(カリスマタ<sup>たまもの</sup>賜)と明らかに区別する。

あるいは、神の言が私という人間の中に成っている事態、これが誠だという。どこまでも、神の言が原動力だ。これが私の中に化体かたいし、私の中に成っている。そういう神の言によって、あるいは神の霊によって、私は誠まことなる存在とされる、信ある存在とされる。だから、信も



誠も、神の御意、御霊が原動力であって、自分の側からの誠とか信仰とかいうものではないということをお願いしたいわけです。

十字架のキリストによって「無」罪とされ旧き我に「死」に、旧き我が「砕かれ」、復活のキリストのゆえに深き全我を投じての祈りを絶えずすることにより、み霊がわが「有」となり、新しき我に「生」き、砕かれた瓦が新たに「玉成」の道を辿る。この私という鐘自体は「土の器」に過ぎない。けれどもキリストのみ霊を呼吸しているうちに、すなわち天空を空洞に宿しているうちに、次第に金銀も及ばぬ天鐘にされてゆく。かくて天空すなわちみ霊のキリストが、鐘すなわち私に一体一如となつて下さる。この恩恵のゆえに、天鐘とはいうのである。しかもそれはキリストという原始福音体により天に足場を、否、頭場をもつからいよいよもつて天鐘なのである。そして総ての基督者はこの意味に於いて天鐘ではないか。少なくとも使徒たちの信仰の現実はかかる質のものであったと信ずる。私はとるに足らぬ基督者であるが、その信仰の質は使徒たちの信仰の質と同質たらん事を願う。原始福音という語もキリストこそ福音の原始であり、使徒たちの伝えた福音がこれに正しく直結しているから申すのである。

今、なにか「原始福音」というと、「ああ、手島さんのグループか」となりますけれども、そうじゃないです。元々、小池先生が「原始の福音」ということを言い出された。「幕屋」ということを言い出された。それを全部向こうに取られてしまったんですよ。それで、先生はお使いにならなくなったわけですね、「喧嘩はしたくない」ということで。果して特許料をお払いになっているかどうか、それは知りませんが（笑）。そういうふうな「原始福音」なんていう一つのグループの、それ自体一人歩きしている言葉ではなくて、本当にあのキリストの時代、福音が始まった時代、その時の根源の始めに帰ろうという、そういう意味で、人によって歪められざるそのものの姿、それで「原始」という言葉が使われたということ覚えておいていただきたいと思えます。

原始の生ける福音は歴史的にも限りなく展開してゆく。しかしその展開にあたって福音の奥義からずれを来たすような事態に対しては、どこまでも原始の質がとりもどされねばならない。根源のキリストのみ霊は無限の内実を以て展開し給う。これに投我し、即せんと願う。これ、真に神の歴史に参与する所以である。》

## ● 信行一貫

### 《信行一貫》

かくて鐘身一如の霊想は、すなわち天鐘一体と化したのである。東洋の鐘の相は素晴らしい無即無限の相を呈している。福音はこの東洋的な「無」を新たな「無」となし「無限」たらしむる内容である。相対的な「無」(教会)でもなく「有」(教会)でもない。「あれかこれか」でなく「一切が無か」でもない。無即無限、無即有、無即全



無即一切の消息である。しかしこの「即」は安易な「即」ではない。単なる瞑想が生んだ「即」ではない。この「即」の鍵は十字架、復活、聖霊のキリストである。

「即」は十字架だ。その十字架はまた復活・聖霊と切っても切れない三相一貫性のものである。この「即」を大事にしてほしいという。

この「即」の鍵は十字架、復活、聖霊のキリストである。この「即」を体得 体現することが人生の目的と行って過言でない。

これは大胆な言葉ですね。人生の目的はこの「即」を体得することだという。神さまの聖旨からいうなら、

「あなたたち一人ひとりがこの即を体得して、生まれ変わって、神を讚美している姿、生き生きと生きていく姿、それが神の喜びだよ」

と。神さまは人々に本当に生きてほしい。生命を与えてやまないお方です。ご自分は生命そのものなるお方。その生命を与えるということが創造ということだったんです。神の創造というのは生命を与えることです。創造というのは、被造物に創造者と同じ生命を与えることが創造なんです。これが愛なんです。

それは別な言葉でいえば、この十字架という無即無限の「即」を——いっぺん我々はダメになってしまいましたから、見失ってしまった——失われた存在になってしまった我々がもう一度、本当の姿に変えられる。始めに造られた姿以上に素晴らしい姿に変貌する。そのことを神さまは願ってくださる。それがこの十字架という門を通って、聖霊という生命を受けて輝くという、それ以外にはないではないかと。だから、この「即」を本当に体得すれば、そこから展開してくる事態は神の喜び給う事態である。その十字架と御霊がしっかりとっていていけば、サタンも寄りつくことができない。しかし、それがしっかりとっていないと、いつしかサタンに振り回されることになる。

私はいつも申します。この地上の世界、我々が生きていくこの相対界は、絶対界と触れ合っていないながら、しかも悪しき霊が働いている世界なんです。この悪しき霊が完全に滅ぼされるのが黙示録、新天新地なんです。それまでは過渡期なんです。我々は絶対的な質を賜って、永遠の生命の中に生きていながら、しかも絶えず我々の足を引っ張って、神さま・キリストさまから目を背きさせ、振り回そうとする力が働いてくる。しかも、それは良心の声だとか、麗しい装いをしていろいろ誘いかけてくるから困る。小池先生はよく「白きサタン」ということを仰います。上辺はいかにも天使の如き装いをして、その中身は狼である。キリストも言っておられる。そういうものから守られるためには、絶えずキリストにしがみついていること、祈りをしていくこと、そして集会を大事にすること。そういうことによつて、悪しき霊の働き、囁きから守られるんですね。カプセルの中に守られる。内村鑑三も、

「サタンというものの実在を信じないやつはもうダメだ。その人の信仰なんか私は信用しない」



というようなことを言っているところがある。

私だつて見たことないんですよ、サタンなんて見たことがない。天使も見たことがないけれども、サタンも見たことがない。けれども、明らかに霊力が働くんですよ、人間に霊力が働きます。でも、いつかもしも申し上げましたように——私はそういうことは感じないけれども——ちゃんと私を守ってくれている霊がたくさんいるわけです。こないだも本を紹介しましたね。ちゃんといろんな天界の霊たちが一人ひとりを一生懸命に守っているんです。その人たちが願ってくれていることは、

「あなたはキリストを見ていなさいよ。キリストから離れてはダメです。キリストの中に(エン・クリスト)の現実におりなさい。そうしたら大丈夫です」

と。その「エン・クリスト」(キリストの中に)という現実から離れたら危ない。つまり、「即を体得していく」ということです。十字架・御霊のこの恵み、この中にだけに生きていく。そこから目をそらすと危ない。そういうことですから。私はこの文章を読んで、本当に驚いたんです。

「この「即」を体得、体現することが人生の目的といって過言でない」と。時には先生は、

「人生の目的は神讚美にある。神を讚美することが我々の人生の目的である」と仰いますが、みな一つのことなんです。

この「即」を追求せんとあらば、この三相一貫の恩恵のキリストに

「三相一貫」とは「十字架・復活・聖霊」一貫ということ。このうちの「復活」がそのうちに抜けてしまっていて、先生の場合は「十字架・聖霊一如」という。というのは、復活はあまりにも当然で、キリストが復活しないなんてあり得ない。あまりにも当然だから、それが落ちてしまった。

「十字架・聖霊が一如の事態だ」

というふうには、のちほどは仰るようになりますけれども、この頃は「三相一貫」と絶えず言っておられた。

この三相一貫の恩恵のキリストに全霊全身、全力を以て投身するの「信」を要す。「信」はまたこの罪人がキリスト、すなわち神の言を受けてついに栄化して、言たるキリストと一体となり、「キリストの像かたちに化する」事態をも意味する。

非常に先生は、「罪びとにして義人」、「この罪びとがそのまま義人とされている」ということのみならず、

「その罪びととなる我々がキリストの御力によって、キリストと同質、同じ輝く姿に変貌させられていく」

ことを強調しておられます。晩年はあまり強調されなくなりましたね。それは、

「私はいつもキリストに『主さま!』と言ったら、もうキリストと一つになつてい



るから」

と言つて、もうそんなことは言われなくなりましたけれども、この頃は非常にそのことを言つておられる。私もそれを言いたいと思う。

「我々は遂にキリストに化するなり」

と、パウロが繰り返して言つてますしね。コロサイ書もピリピ書もそのことを言つていますから、こここのところを大事にしていたいだきたいと思ひます。

「信」はまたこの罪人がキリスト、すなわち神の言を受けてついに栄化して、言たるキリストと一体となり、

あるいは、霊なるキリストと一体となる。

「キリストの像かたちに化する」事態をも意味する。体現が還相ならば、帰入は往相である。

これは仏教の方の言葉ですが、絶対界と行き来することです。絶対界と行き来しまして、キリストは、地上にあられたイエスというお方は絶えず天なる父なる神との間を行き来しておられた。「父よ！」と祈つて父と一つになる。そして、父のふところから出てきて、人々に生命を領わかち与えられる。よくキリストは山へ行つて祈られましたね、夜を徹して祈られた。そして、御霊に満たされて山を下りてこられた。そこから御業が始まつている。

だから、父の方へ往く、これが「往相」です。それからまた戻つてきて地上に還つてくる、これが「還相」です。「往いつて還かえる」、あるいは「還るために往く」といつてもいいかもしれない。先生はそれをどう言つておられるか。「体現」が「還相」です。聖意体現の体現。ここで聖意を体現して、神の聖旨みじが現れる。神の愛が現れる。その相すがたが「還」。そして今度「帰入」。我々からいえば、「キリストの中に帰り入る」こと。イエスさまだったら、神の中に帰り入つていく、それが帰入、「往相」です。それは祈り入りますから、祈り入るといふ「祈入」。祈り入り、そして力をいただいたて、また還つてくる。それを繰り返さないとね。往きつぱなしでもダメですし、還りつぱなしでしたら、また力がなくなります。だから、深く祈り入り、そして力を頂いて帰つてくる。帰つてくるのは人々に仕えるために帰つてくる。愛をもって仕えるために帰つてくるんですよ。自分が幸せな人生を送るために帰つてくるのではない。人々に仕えている姿において、神さまの愛、キリストの愛が充満してきますので、その時に、

「ああ、自分は幸せだ」

と感じる。本当にキリストに満たされて人々に接している時に、「ああ、私は幸せだな」という実感が湧く。「幸せ」自体を求めたら、それはダメです。

「気づいてみたら幸せでした」

というのが本当なんです。それはすべてがキリストから流れてきます。キリストの中にはすべてが籠もっているんですから。愛も智慧も力も生命も全部、キリストの中にある。それを私たちはいただく。



かくて「信」とは観念的なものではなく正にそれ自体烈しき内的な「行」である。つまり、祈りである。「主よ!」と言って、身を投げだしてキリストの中へ躍り込む。戸を閉じて独り静かに瞑想して、

「主さま! このどうにもならないやつを何とかしてください!」  
と言って祈っているうちに、

「もうどうにかしてやっているじゃないか、十字架で全部済んでいるではないか。気づいてごらん。そうだろ、いつ見失ったんだい? もう片づけちゃっている。もうすべて片づけた。その中にあなたはいるではないか。だから、大丈夫だよ!」

「はい、ありがとうございます!」

と。そういう、キリストとの甘い蜜月のその祈り。ふとこころに抱かれ、その中に安らうという、それが祈りなんです。だから、苦しい時は、でつかい声を出してくださいばいい。人のいないどこか海岸や小山に行つて、「ウワッ!」と叫べばいい。吐き出して、気がついてみたら、入れられているということに気づかされる。そして、

「うん、これでいいんだ。人にいろんなことを言つたつて始まらない。主さまに言う。主さまが聞いてくださるんだ!」

と。人もある程度は、聞き役になつてくれますよ。でも、本当の意味で自分のことを百分百わかつてくださる方は主さまだけです。それを一番知つておられたのが小池先生でしたね。小池先生は、正に「語るに友なく」というかな、非常に寂しいお方だったと思う。だから、それだけキリストに深く祈り入られたと思うんです。

我々も、人はみな兄弟姉妹、お互いに愛をもつて助け合っているけれども、その兄弟姉妹だけに依存したら、それはダメなんです。やっぱりキリストに依存する。キリストに依存しているその人をお互いに助け合うんです。やっぱりキリストなんです。一人ひとりが主さまに直結する。一人ひとりが主さまに行つて、そして帰ってくる。これを一人ひとりがやっています時に、お互いの中に御霊の環わが、つながりが出てくるんですね。その場がなければ、いくら人間的に助けようと思つたり、同情しても、限度があります。

その相手の人ご自身が直接にキリストの懐ふところに入ること。キリストを抱いていらつしやるのは神さまですから、キリストと父なる神さまは一如一体ですから、我々は十字架という門を通して、「主さま!」と言って入つて行けば、そこにはキリストと父なる神さまと一体の世界がある。その中で安らつてこそ、私たちは本当の平安そして力に守られます。だからここに、

深い祈りのないところにこの「行」の消息は体得できない。而もこの「信」の原動力はキリストにある。さればこそひたすら投身投我が出来るのである。我らの呼吸が自然である如く祈りが魂の呼吸となつて始めて、み霊の内住は身についてくる。有難きかな、生けるキリストの聖愛の力よ。パウロがロマ書八章の終りで絶叫している所以



である。》

この辺はもう全く先生は終始変わらなかつたですね。もう何十年経つたつて変わらな。それだけの質のものを先生は、聖霊のバプテスマを体験されて、もう体得させられてしまつたんです。それがグングン展開していきますけれども、質は変わらない。「なんだ、先生はちつとも進歩してないのか？」と、そうじゃない。いよいよ深められていくんです。そういうことですから。

### ●東西融合

#### 《東西融合》

かくて東西融合を念じていたゲーテの悲願も正に福音によらずんば満たされない。而も福音の世界は東西をも南北をも超絶したる天界であり、その天界は東西南北何処にも遍在するものであるがゆえに、東西南北を打つて一丸となし得るのである。大和への道、キリストの体としてのエクレシヤの実存共同体への道はここに在る。

「諸行無常」も未だ相對觀にとらわれているからのなしである。無常をつらぬいてこそ、無常ならざるものが現成げんせいして行くのである。

そうなんです。無常なる中に、儂おぼき中に、儂くないものがドーンときて、それを与えてくれる。これが福音なんです。無常を否定するのではない。我々は無常である、過ぎ行くものでしかない。その無常なるものだけに目をとめたら、実に私たちには希望がない。しかし、無常なるところに無常ならざるものが突入してきた。それを与えてあげるといふ。

やっぱり、無常という自覚がなかつたら、この福音のありがたさはわからないんです。幸せいっぱいの人には福音がわからない。必要がないんです。けれども、

「自分の欠乏を感じる者、儂おぼさを感じる者、空しさを感じる者、悲しみを覚える者、今泣いている者は幸いだよ」

と、慰められる。しかし、

「今、笑っている者、今満ち足りている者、それは禍わざわいだ」

と。本物の望みがないから。しかし、やがて目覚める時がくるでしょうと。それが「山上の大告白」の言葉、意こころだと思えます。

「よろずのことに時あり」

なんです。だから、今満たされている人に、幸せいっぱいの人に、

「福音でなくてはダメですよ」

と言つたつて、なかなかそれは響かない。いただいてももらえないんですよ、真つ昼間に口ウソクの灯を点して、「これが大事ですよ」と言っているようなものでね。暗くなって細々として心細くなった人に、

「実は、心の扉を開いたら、太陽の光が差し込んでくる。この光が差し込んできたら、



闇を歩くことはなくなつて、本当に大転換が起こる。これが御意みこころなんです。御意以上に強いものはないんですよ」

と言つて、我々は励ますことができます。

無常をつらぬいてこそ、無常ならざるものが現成げんせいして行くのである。天鐘体的実存となればどんな小さな言ことばも行おこなもむなしくないことを知るのである。

「わが名のためにかくの如き一人の幼児おとこなを受くる者は我を受くるなり」(マタイ 18・5)

キリストを受けた者には、もはや死はすでに死ではない(ヨハネ10・28)、本質的に打ち勝たれている。

「若しキリストよみがえ 甦よみがえり給わざりしならば我らの信仰はむなしく、我らなお罪に居らん」(第一コリント15・17)

キリストはその聖なる霊生を以て罪と死に打ち勝つたことをその復活によって実証し給うたからである。十字架は全く我らの贖罪のための死であつてキリストは実は死を経ずして直ちに天界に昇り得る神の人であつた。キリストが復活することにも優まして当然なことは実は天上天下てんじょうてんがにない。これが当然でなかったら、聖とは何か、霊とは何か！

戦争が罪悪であることは明白であるのに、原子兵器を製造する二〇世紀の人間は火山を掘っているようなものである。世界をいつ爆発させようというのだろう。全世界がもし本当に平和を願うなら、原子兵器全廃、否、軍備全廃、即ち無刀流となつてキリストの愛を100%に受くるの道是れである。全世界の平和はこの角度から志さねばだめである。キリスト・イエスの十字架はこの零〃無を与えんためであり、復活の霊生はこの百〃全を与えんためであつた！ 聞く耳ある者は聞くべしである。日本のためこれからさき何年であろうと、キリストの本願たる天鐘を打ち鳴らすのほかない。

天鐘！ み霊たまわが内に来たり臨み給う。この終末的現実みじうに於いて、いよいよ、キリストの御霊宿り給うて(ロマ8・9)、汝が聖意みじうをこの土器に現成せしめ給え。天鐘一体の消息を静かに瞑想し深く祈らしめ給え。新たに原始福音てんいんの天韻、この鐘に鳴り出で、これを聞く旅人の心をなぐさめ、その人々を天的歓喜に入らしめ給え。武威野の一角、吉祥寺に鳴るこの天鐘を主はいかに用い給うかを知らず。ただ限りなく誠の天鐘と成らんことのみがこの小さき者の悲願みだ。十字架は聖意貫く義の経線けいせんと聖生みいのちあまね遍あまねき愛の横線である。そしてまた何を新たに語らんとするか。天地を貫く縦木は東方的な静の相、霊生合一の祈りの境地、静中に強き力ある神意神愛の降下する相。

十字架の縦線は、神・キリストの絶対界がこの地に下つてくる、地上界に下つてくる縦の線。これを受けとるのが祈りだという。深く祈り入ることによつて、この神・キリストが自分を貫いてくださる。それはまた義の貫きでもある。義よというのは、「正義を行う」とか、「自



分は道徳的に正しい」ということではなくて、神さまの御意が真つ直ぐにその人によって貫かれている事態、神の御意がそこに成っている事態、それが義だと言う。御意は愛なんです。その神さまの愛をいっぱいを受けて入る事態。そしてまた愛は生命です。その生命を受けている事態。この縦のつながり、これが十字架の縦線だという。

そして、それを受けた人が今度は横棒となって隣に向かって、隣人に向かってその愛を流していく。これが横線で、同時にまた東西、東洋西洋、そういう地球を横につないでいくような愛のつながりでもある。それが先生の言おうとされるところだと思えます。

東西を連ねる横木は西方的な動の相、

そこは働きですから、他者に向かって働きかけていきますから、動的事態です。祈りは静的な事態です。

実存共同体展開の面、動中にあつき生命ある隣人愛発現の相である。福音は東方的なものと西方的なるものを

東方は瞑想ですからね、祈りにふさわしい。ヨーロッパだって、ちゃんと修道院とか、世の神秘家なんていうのは本当に祈りの深い人たちだった。今日的に言えば、何だかヨーロッパ人は活動的であって、日本人は瞑想的と思われるかもしれませんが、でも、残念ながら今の日本人はそんな瞑想的でも何でもありません。もう実に残念な姿、本当に嘆かわしい姿です。だからやっぱり、本来の姿に帰ってほしい。そして本来の日本人の持っていた善きものにこの福音がドーンと入ってきたら、そこに个性的にして普遍的なものが成就するんです。それが先生の悲願だったし、また我々の願いでもあります。我々は天鐘を引き継いで行っているんですから。

福音は東方的なるものと西方的なるものをその十字架に於いて象徴し包摂している。

み霊の祈りに於て深く、愛の実存に於て強き、静動一如の福音こそ今後のキリスト教界の課題である。》

## ● 主の栄光の証者

### 《主の栄光の証者》

パウロの言に従って、私たちも告白したい。神意の霊知(エピグノーシス)で満たされ、主のみ旨にふさわしく歩んで真に主の歓喜となり、いよいよキリストの聖意体現へと生長させていただきたい。また神の栄光の勢によるすべての力でこんな私たちを強化し、何ごとも欣んで忍び且つ荷う力を与え、光の中にある聖徒たちの嗣業にあずかるに足る者としてつつあり給う父に感謝せざるを得ない。私たちは聖子に在って贖罪すなわち罪の赦しを得、罪から本質的に解放され、キリストという義を宿している。神は神性の充満(プレーローマ)を彼の中に宿して居られる。私たちはこのキリストに宿っていたたくことを無限に求めてゆくのである(「ロサイ1・9」参照)。



願わくは日本国中の梵鐘に代って、今こそかの偉大なりし仏門のあとを受けて、基督者の天鐘、山間に農村に都市に漁村に、新しき信仰の終末的実存を以て鳴り出で、教会といわず、無数会といわず、幕屋といわず、いずれの集会に於いても、原始福音の誠の響きを伝え、この社会の諸々の問題に対して真の解決への道を開き、光を投げ、真理を示し、力を現わし、愛を以て一切を荷いあげ救済しゆかんことを。かくてキリストの栄光を身証せんことを！

「視よ、我は世の終末まで常に汝らと偕に在るなり」(マタイ28・20)  
と主は言たまはつ。」

もう終りの所は祈りですよね。

### ● 告白録第4巻 『狭き門』

告白録の第4巻 『狭き門』(キリスト告白録第4巻 『狭き門』 マタイ伝福音書(4)、2001/4/15 曠野の愛社発行)は、これのみならず、今までの告白録は本当におりにふれて取り出して読んでください。この中に「天鐘」という所が出てくる。これは1960年8月19日、伊香保でのお話です。この第一回集會のお話に因んで、私は「はしがき」を書かせていただいた。これはとても大事な論説といひましようか、文章です。本の装幀をなさった前野洋一さんがこの『狭き門』の第一の文章を読んで、痺れてしまわれたそうです。本当によく書けている文章です。その中の一角に「天鐘」という項があります。そこをちょっと紹介します。これは、目にある梁木を取り除くという、

「自分の目に梁木があるのにそれを放っておいて、人の目にあるゴミを取ってやるなんてとんでもない」

という所からずつと話しておられる所です。その22頁に「充滿しているところの無」という所があります。

「この梁木を取り除くのは自分で除けない。私を取り除いてやるよ」  
とキリストは仰る。

《私を取り除いてやるよ》

……「言つ者は私である。私に来てごらん。そしたら、私を取り除いてやるよ。心配はいらん」

と。これが福音だと。

……実はキリストはその「取り除く」ところの実力を与えている。だから、心配はいらん。

充滿しているところの無

そして、取り除けたらば、私たちは自分の義からはずされてしまつわけだ。それからはずれてしまつ。即ち、自己義認というのは要するに、我に執すること、我執して



いるわけです。

先生は「四つの非ず」ということを言われました。そこで一つ言っているのは「自己義認」、自らを義とすること。自分を義とするということは、他を審くというパリサイにつながる。だから、

「自分自身は無義者である。義ではない。もし、義があるとしたら、それはキリストから賜る義だ、そこに徹底しろ」

ということを仰るわけです。罪ということの最大のもは自己に執すること、自己を義とすることだという。

即ち、自己義認というのは要するに、我に執すること、我執しているわけです。

それが良からうが悪しかろうが、良いものであろうが悪いものであろうが、とにかく自分の持っているものに執着していることはみんな「罪」なんです。我執というやつです。聖書の学者がもし、ギリシア語やヘブライ語ができることを鼻にかけていたら、それは我執ですよ。そんなのはダメです。この我執というやつをすつかり抜かされる。

5……さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

そうしたら、どうですか。日本人は一番よくわかる。私がない世界に入っていく。無私の世界に入っていく。私心がない。私がない。私心というやつがなくなっていくから、無色透明である。曇りがなくなっていく。曇りがなくなっていくから、相手の小さな「ゴミ」が今度は見えてくる。見えてくるけれども、曇りがいないから、この見えた者が、「お前はそんなものがある」と言って審かれないんだ。見えたって、審かない。

「塵を取り除き得ん」と、今度はキリストは仰る。「それはああ、痛がるつ」と言っていて、それを取り除いてあげることができる。同じく相手の欠点や何かが見えましても、それを審いて見ることがない。審いて見ることは、自己に執している自己義認というやつです。光がきて、そしてそれでもって相手の者の「ゴミ」を取り除き、暖め、痛みや苦しみや悩みを共に感じ、共感してこれを取り除くことができるようになる。ここにキリストのこの譬えの言の素晴らしさがあると思つ。

私が言うところの無私だとか無だとか言つことが、何か冷たいと澄ました聖さと  
いうような具合に考えられたら、私は非常に困る。そんなことを言っているのではない。  
無という表現に私は決して執するわけではない。こんな表現なんか執着しているの  
ではない。

だから、無は即、無限の内容をもっている。無は即無限です。空無ではない。虚無  
ではない。充滿しているところの無なんです。真理というものは矛盾の表現でしか言  
えない。「ヘー、そついつ充滿している無ですか」なんて。それは自分が充滿してい  
るのではないんだ。他のものが充滿している。

天鐘



私は自分の号を「天鐘」と申します。ちょっと偉そうな名前だけれども、これを偉そうに思われたら困る。私はお寺の除夜の鐘を聞くことが好きです。ある時、聞いて瞑想していたら、ある真理にぶつかつた。即ち、東洋の梵鐘にはベロ〔舌〕がない。中に何も無い。ベロがなければ鳴らないかというと、これを撞けば、ゴーンと鳴る。なぜ鳴るかというと、その中には天空が宿っている。天が入っている。天に抱かれ、天を宿しているという素晴らしい境地です。だから、撞けば、鳴るものは即ち天なるか鐘なるかというわけで、そこで、天鐘という名前にした。即ち、天と鐘とが一如の相である。これは私が自分でとり澄まして天鐘一如になつたなんて決して申しません。これは私にとっては恩寵の事態なんです。この天は即ちキリストの聖霊である。聖霊が私の中に充滿したもつとときに、「聖霊のキリストと我とは一つ」という恩寵の事態を悲願として申しているだけの話で、現実には私が天鐘一如の事実でありましたなんて言つたら、それは自己義認だ。そんなことを言っているのではない。私は自分の悲願をただ表現しているだけの話です。

そういうのが即ち、無にして充滿したところの事態である。だから、自己に執した、そんな判断や何かでものを見ているようなことでなくて、楽に己が抜けたときに本当に天的な認識ができて、またその認識は愛の認識ですから、本当に歎びの世界に相手を変えていくことができる。これが即ち、「審くなかれ」から発しているところのキリストの聖言のころではなからうかと思う。……》

これが1960年のお話です。だから、先生にはもう本当にずうつと一つのものが流れている。表現は少しずつ変わられたりしましたが、流れているものはずうつと一緒です。それを我々は引き継いでいる。キリストの言葉も福音書において、こうやって文字化されて固定化してしまいました。しかし、それは無限に開かれて、我々に生命を与え続けてくれる。その時代時代において、その社会において、それが千変万化しながら一つのものが貫くんです。それを一つのものに固定したら、生命はなくなりません。

だから、聖書の読み方にしましても、時代の制約というものを絶えず私たちは自覚して——その時代の中で、その社会の中で、その民族の中でものが言われています——でも、それを取つ払つてもなお輝く、なお光を放つ、まことなるものに私たちは気づかされ、受けとつて、我々の方に消化していく。それでないと、たとえば、

「神の名を呼んではいけない。帽子を絶えず被っていないといけない」

とか、なんだかんだ言われていますね。カトリック教会だったら、女性は帽子を被つてしか教会に入れないんですよ。私はあんなことはどうでもいいと思うんですね。

「頭なるキリストを辱めることだ」

なんて書いてあるけれども、

「女性は帽子をかぶらないと教会に入るのはいけない」



とか。なんだかちよつと躓きになりそうなのがいつぱい出てくるんですよ。

「女は教会では黙っておれ。絶対にものをしゃべるな。帰ってから男に聞け」

とか、非常にそういうことはパウロを通して言われているから、パウロはものすごく評判がわるいんです、神学界では。そつちのフェミニスト神学の方では、パウロはコテンパにやられてますよ、「男尊女卑だ」と言ってるね。しかし、パウロはそういうことを通して言いたかったことは何かと、そこまで突き抜けないとダメなんです。

福音書はイエス・キリストそのものを、いわば生なまのキリスト、生なまのイエスさまを表している。今度はこれに躓きますと、その現象に振り回される。癒しだとか、奇蹟だとかで躓く。このパウロはといいますと、霊なるキリストを表している。パウロは生なまのキリストを言わない。御霊のキリストを——パウロに絶えず現れて力づけ、幻を与え、導きたもうた——あのキリストを言う。

パウロとキリストとの出会いはまずダマスコから始まりましたでしょ。そういう霊なるキリストから始まっています。だから、その面では、私たちはパウロにとつきやすいんです。パウロに現れた霊なるキリストを通して福音書のキリストを見る。

この二つを媒介してくれているものはヨハネ伝だと思います。ヨハネ伝はイエスという方を肉なるイエスの姿を語りつつ、そこで言われていることは霊なるキリストなんです。ですから、マタイ・マルコ・ルカという三つの福音書とパウロの霊なるキリストを媒介しているのはヨハネの福音書だと思う。そんなふうは大雑把に私は受けとっている。

全きものが今も動いている。その響きに我々は耳を傾けよう、心の耳を澄ませよう、そして祈り入ろうと。やっぱり、先生の仰ったことは正しい角度を仰っていると思う。言葉にもとらわれず、しかも逸脱をきたさないという読み方、それは限りなく聖霊に導かれることだとしか言いようがない。

文字に囚われる教派の人がいる。文字通りにその通り、ひとつもズレをきたさない。それは、人間が自分の頭で「これは普遍的なもの、これは一時的なもの」なんてなことを言うのは傲慢だというわけです。主観おちいに陥るといふ。だからもう、御言を固定してしまうという行き方です。

それから他方では、それをガタガタにしてしまうという、全部を白日の下にさらして、そのうちで「イエスの本当の姿はこれだった」というようなイエス像を描きだして、パウロなんてのはクソクラエだという。それでは何も残らないですよ、生命あやまは来ない。

だから、人間というのはいろんな逸脱があります、いろんな過あやまちを犯す。そういう試行錯誤を経ながら、しかし、究極のところ本当に

「生なまきた生身の人間の私は生きてます、私は活かされています。私はこれでなければ生きられません。どんな偉い学者が何を言おうと、私はそれでは満足できません。私は活けるキリストの御霊によつて活かされて初めて喜びを得ました。永遠の生



命を味わいました」

と、これを一人ひとりが言っていてこそ、本当の福音だと思う。そうでないと、学者の研究によつて、こちらの信仰があつちへ行つたりこつちへ行つたりしたら、たまりますかいな、そんなものは。向こうは向こうで真剣なんでしょうけれども。やつぱり、

「もし聖書学者というなら、小池先生と同じ霊的体験をしてくれ、パウロと同じ霊的体験をしてくれ、その中からものを言ってくれ」

と、私は注文つきたい。それを向こうに証明してもらいたい。それでなければ、一面的だと思う。それからまた、

「聖書の文字にこだわって、「信仰、信仰」と言っているのは、そんな偏狭なキリスト教では、日本人は絶対に「はい、そうだ」とは言いませんよ。日本人のハートが揺さぶられるような、そして本当に「然り、アーメン」と腑に落ちる福音を告白してください」

と。小池先生は、

「狭き門、細き道を我々は歩んで行く。教会にも非ず、無教会にも非ず、キリスト直結だ」

と叫ばれた。

「あなたたちは主観的に思い込んでいるだけだ」

という声に対しては「否！<sup>いな</sup>」と言い、

「伝統的な教会でなければ救われない」

という声に対しても「否！」と言い、

「あなたたちは素人集団ではないか」

「そうだ、素人集団だ。キリストも素人集団の首<sup>かしら</sup>だった」

と言つて、そうやっていく。しかも、職業を持ちながらですよ。いろいろと職業を持ちながら、さきほど私はずっと読んでいった最後に、

「第二の特色は、「聖」と「俗」の共存である。……「聖」なる方が「俗」なる世界に降りて来て、俗なる人間を、あるがまま、そのままに救い上げる。闇を光に化する、死せる者に生命を与える、日常性の中にこそ聖なるものが宿る。日常生活の中で我々は、神の絶対次元に触れ、救いにあずかり、生命づけられて生きてゆく。」

とありました。「日常生活の中で」というのは、我々のそれぞれの「職業生活の中で」ということなんです。これはあの「狭き門」の中でちゃんと書いておられます。

「本当の福音、健全なる福音とはそういう、職業を持って日々の地道な生活の中で現れてくるものこそが本当の福音だ」

ということをあの「狭き門」で言っておられますが、これは明らかに「原始福音」のグル



ープに対しての言葉なんですね。

「私は何も「原始福音」を審くのではない。そこへ流れて行った人を審くのではない。

その人たちのことを惜しんで言うだけであって、決して審くのではない」

ということを繰り返して言っておられます。この「狭き門」での小池先生の悲痛な叫びです。だから、「霊力的宗教か道念的福音か」と言われる。

「我々は道念的な福音、この狭き門、細き道を行く。しかしそれは無限無量の広がりを持つている」

と。そういうことで、この「天鐘」という文章とこの「狭き門」を書かれた時代も比較的近い時代ですし、もう一度、この文章を読み返していただいて、そして「天鐘」というものに籠められた先生の悲願、それに思いをいたして頂きたいと思うんです。

「本願」というのは神さまの方ですね。先生は「悲願霊願」ということも言われた。この「霊願」というのも神さまの側のことです。「悲願」というのはこっちの側から望み願うという、祈るという角度です。

## ● 祈り

では、お祈りいたしましょう。

主イエス・キリストさま、秋の始めにこうして兄弟姉妹をここに呼び集めてくださり、今は天界にあられる小池天鐘先生のこの「天鐘」という素晴らしい文章を今日、皆さんと一緒に味わうことができました。

今、私たちのいますこの空間が実に天空を宿している天鐘そのものでございます。主さま、ここで私たちは福音の響きを頂きました。無限無量なるあなたさまを頂きました。そして、狭き己から解放されて、無限無量なるあなたさまを頂きました。どうぞ、あなたの響きをもつて、一人ひとりの音色をもつて、皆さん一人ひとりを輝かしてください。

私たちは福音を頂いただけでなくて、これを全世界に向かって発信していく責任を頂いております。それは一人ひとりが己の音色をもつて天韻を響かせ、「ここに本ものがあつた」と世の人たちに気づいて頂くことでございます。

今はこの情報革命によって世界は狭くなりました。瞬時にして世界に発信することができます。どうぞ、そういったものを駆使して、本当にこの無限無量なる普遍的なる福音をこの個を通して世界に発信できますように、私たちが祈らしめてください。私たちの祈りを無限無量なる祈りとして、世界を揺り動かす祈りとして、悲願霊願を達成せしめてください。

主イエス・キリストの尊き聖名によってこの祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

